

◆基調講演 1

「創造の世紀におけるアジアの人材育成」

ー文化・芸術とものづくりの基盤に立っている関西地域の位置付けー

立命館アジア太平洋大学

モンテ・カセム学長

(司会)

モンテ・カセム学長は、1970年、スリランカ大学をご卒業後、国費留学生として、日本に來られました。そして東京大学の大学院で学ばれております。その後、国際連合の地域開発センターの主任研究員、あるいは立命館大学教授などを歴任されまして、2004年から、現職につかれております。日頃、アジアを初めとする世界の若い方々の育成に尽力されておられます。また、NGO活動にも携わっておられます。それではモンテ・カセム学長、よろしくお願いいたします。

井上会長を初めとしてPREXの皆さん、おめでとうございます。15年間で8,000人以上の方を養成するということは、楽なことではなかったと思います。そういう方々に、また戻れる場をつくっていただいたことを、皆さん、感謝したい気持ちを持っておられるのではないかと思います。私も、その一人です。

関西に来て間もない時に、私の研究室がいただいた一番初めの外からの受託事業がPREXのホームページをつくってくれという要請でした。そのホームページをつくってくれた学生の一人は、3回生の時にベンチャー・ビジネスをつくって、今も10年間そのベンチャー・ビジネスをつづけ、会社が2つになっています。PREXの実績には、このことも足してください。

今日は「創造の世紀」というものを中心に、話をさせていただきます。創造の世紀におけるアジアの人材育成に今後、PREXはどういうふうに取り組めばいいか。関西地域の特徴も生かして、文化、芸術の豊かな地域で、このモノづくりの基盤に立った上で、どういうふうにアジアの様々な方とともに歩んでいくかということが、今日の話の根底にあります。

時代の要請は、何であるか。国際的に非常に競争が激しい時代です。グローバル化と言っても、全部バラ色のものではありません。だけど、その競争の中には協調もあるわけです。ゼネラル・モーターズとトヨタ自動車競争相手でありながら、協調してケンタッキーで車をつくっていることもあるわけですね。だからその競争と協調の両輪というものが、新たなパラダイムでもあると思うのです。そこが1つ見抜けないといけないことです。

2番目は、誰でも、どこでも学べる時代になります。IT革命、ブロードバンドの時代になると、時、国境、国籍、性別、年齢を越えて、学ぶ時代になりますね。そうしたら、どういうふうに、こういう教育をやる機関、研修をやる機関が変わらなければいけないかというのが、大きな課題になります。この世紀では創造性豊かな人材を求めます。技術と芸術の合体の時代です。今までは、それは分けて、文系、理系と分けて、考えていた時代です。今後どうなるでしょうか。この技術をほんとうに増していこうとしたら広い教養がないと、新しいイノベーションや、創造力が出ないんじゃないかと思います。われわれの大学も、昔みたいに新学部だけをつくっていいのかということも、疑問に思う次第であります。それで立命館学園がミレニアム・プロジェクトとして、2000年にアジアの人材育成、若い人材を養成するためにアジア太平洋大学を設立した。その責任者として勤めている私がそこに住み着いて一番感じるのは、その創造力です。

72カ国から来ている学生諸君の日々の生活から出てくる創造力が、こういう場面に現れるわけです。この真中にある映像が、スペインのフラメンコの踊りをやっている学生諸君です。この真中の方だけが、スペイン語圏から来ているんです。ここはスリランカの回教徒、ムスリムの女子学生です。こちら日本人なんです。だから自分の国を越えて、他人の文化圏に入って、こんなようなすばらしい催しができる。春から秋にわたる毎週、アフリカ、インド、アメリカ、なんとかのウィークをやっているわけです。

これが、たぶん私が元気になる元ではないかという気がするんです。秋の学園祭を見ても、こういうような風景なんです。これが関西のちんどん屋の文化から来ているんじゃないかと思うんですが、ほんとうにキャンパス自体が、いきいきして別府市からも人が入ってきたり、観光名所になっているんです。水曜日の午後は、必ず外部のいろんな方が来て話せるようにしています。

こちらは御手洗社長です。この方はきびしい方です。来る前には、ちょっとときどきしていました。どういう評価になるんだろうと。講演をなさった後、「社長、どうでしたか？」と聞いたら、「久しぶりにおまへのところに来て、アメリカの大学にいるような気持ちになりました」と。見渡す限りに人の顔が違って、これが見渡す限りの顔です。だけど1つだけ、アメリカと違ったと。ちょっとときどきして、心配して、「どうしたんですか？」と聞いたら、「いや、アメリカでは足を椅子の上に置いたり、コーラを飲みながら聞いたり、アベックで一緒に来たりするような学生諸君が大勢いるが、ここは行儀良くノートを取りながら聞いている学生がいたけれど、質

問がきた時にはアメリカの大学にも負けないような立派な質問がきた。」安心しました。その左下にある写真も似ているようなところですが、韓国と日本の間が外交で緊張している時、韓国の大使が来て、日本人学生や、韓国の学生や、その他の学生たちと話し合っ、この競争の下の協調ということを語っていたのではないかと想像します。また、大学が机上で勉強するばかりではなくて、現場に出て社会貢献もしなければいけないのではないかと思います。安全保障のような難しい現場には、皆さん日頃行けないんですが、私がいつも言っているのは、そういう方々が皆さんの足元に来れば学べるでしょうと。先の御手洗社長みたいに世界が自分の足元に来たら、いろんなものを学べるでしょうと。それを励みにして自分も世界に向かってください。会議中は、限られた人しか入れないんですが、時々公開されたりするんです。公開した時には、誰が何をしゃべったかということと言えないんですが、中味は大いに公開できるというルールなんです。そこで大量破壊兵器をなくすためには、どうすればいいかということ、イスラエルの旧軍隊の將軍と、エジプトの軍縮担当の大使、同様にインドの首相の外交顧問、パキスタンの大使、そういう通常対立する人々を大学という中立的な名と場を借りて、お互いに心を開いて、討論をして、討議をして、その知識をいい世の中をつくるのに貢献しようではないかという場です。

ここで育った学生が、大きくなるんです。元気になるんです。どのくらい元気になるかという、枠を越えて物事を考えるようになるし、勇ましく生きるようになる。構想を行動に移せるような学生になるし、その変容のもとに創造的に対応できる学生になります。例えば上海で暴動が起きた時に、この大量破壊兵器の会議の話聞いた学生諸君が、台湾、中国、日本、韓国の学生と一緒に、ブラジルの学生が司会者で、ニュージーランドのマウリの先生が指導者で、歴史的認識が違って、共同の歴史を歩んでいる方々は、歴史の語り方をどうするべきか。教科書をどうつくるべきか、と1日中語っている。グローバリゼーションの時代の中では、領土というのはどんな意味を持つかと。本当にこういう4カ国の間にある領土問題を解決できないものか。共同開発というのは、どんな意味を持つのかということ、学生諸君自らの力で語っているわけです。この学生諸君が将来、友情を持って生きていけば、世界平和を招く種になるのではないかという気がします。

枠を越えて考えるということは、例えば、この真中にある写真が語るものだと思うんですが、この写真を見た時に、これがわれわれが健常者と思う人ではないですか。この方は障害者です。だけどベッカム選手のように通常、健常者と思う人でも、障害者になる場合があるんです。これはベッカム選手です。スティーヴン・ホーキング博士のような立派な頭を持っている物理学者でも重症を持っている方です。だから枠を越えて考えると、障害というのは何なのかということを考えますね。私は自分を健常者だと思っていますが、だけど眼鏡を外したら、この一番前に座っている方々の顔でさえ、はっきり見えないんです。私も障害者なんです。そういう自覚をわれわれはしないんですね。枠の中で物事を考える。高齢者についても同じです。数多くの行政の方々から、高齢者問題の対策を考えなければいけないという言葉聞きます。高齢者というのは何者ですか。だいたいの方々が、イメージで高齢者を語っているんです。だけどこの方も高齢者です。

これがローリング・ストーンズのミック・ジャガーです。これはマドンナです。高齢に向っている人です。ヘレン・ミレンです。ハーレー・ダビットソンに乗っている老夫婦です。こういう勇ましい生き方も高齢者にあるんです。

そういう枠を越えた考えは、私の研究の場合でもあります。人間社会の価値観とか、そういう感情から見ると、私のように熱帯林を歩き回ると、巨大な残酷なものだと思うんです。なぜかという親の木を絞め殺す木なんです。このイチジクというのは。最初は親の木から栄養を取って、最後に根っこを張った後は、親の木を絞め殺すんです。だけど、その絞め殺しがあることによって、イチジクが育って、食物連鎖を起こして、そこから数多くの大動物や、哺乳類や蝶などが、栄養を取るんです。こういうようなものが、その残酷なイチジクの木があるからできるんです。だから視点を変えれば、別の結論になるということです。この数多くの動物が残酷なイチジクのお陰で、生きているわけです。

だから、このことをモノづくりの現場に展開していこうとした時に、日本や関西地域が持っている一番の遺産が、職人の技、芸術的な生き方だと思うんです。私も「自立のための道具の会」といって300人ぐらいの職人さんたちで形成している会ですが、日本に不用になった道具や技術者の皆さんの力を借りて、年に2回、発展途上国に行って、その貧しい方々の生活を自立への道に歩むように、発電したり、自分の手で水を浄化したり、食品を加工したりするような技術連携をやっているわけです。これはNGOとしての1つの仕事ですが、若い大学生から年配の職人たちが一緒になってやれることです。世代間を越えてやれることです。これがミニ水力発電所をつくろうとしているところです。たった4日間です。これは雨水の浄化、漏れないレンガをつくる方法を教えて、木炭をつくって、水をフィルターして、きれいな水が飲めるような家になるわけです。こういう仕組みで大学とNGOと職人さんたちが一緒になって、このモノづくりの文化を世界の中の貧しい方々と言われている、貧しいといっても、経済的に貧しいだけで、創造力とか、心の豊かさは、必ずしもそうではありませんが、そういう経済的に弱体の方々に持っていつている話です。

ここの根底にあるのは、理論的に言うと、98年経済学のノーベル賞を授賞したアマルティア・セン教授が言っているヒューマン・ケイパビリティということではないかと。アマルティア先生が人間の中に潜在的にある能力だと言っているわけです。その能力を最適化、最大にするために、われわれは社会環境をつくらなければいけない。その中に自由、人権などが非常に大事な要因だと先生は言っています。だけど、そういう要因が、揃えられない国は、どうするか。揃えるべきですか。私の考えでは、この潜在的能力が、非常に苦しい独裁的な環境の中でも、誕生する可能性があるんです。それは創造的なモノづくりの現場に携われば絶対に人間の潜在的な能力が出てくると、私は信じています。その潜在的能力と、モノをつくる間に、何が掛け橋になるかというと、デザイン力、人間の創造力だと思うんです。私は日本のモノづくりというのは、ただ、モノをつくるだけではないと思っているんです。納期をきちんと守ること、お客さんのことを考

えること、お客さんを喜ばせること、自分のつくったモノに対するこだわりを持つこと。そういう心が大事なんです。

スライドに写した、これもデザインです。これもデザインです。有名な世界的なデザイナーです。だけど私は決して、このデザインを評価していません。このオレンジを皆さんが、ジュースにしようとすれば、ジュースができることは、真中のスライドでわかるんですが、ジュースとともに種も飲まなければいけないことになります。職人がつくったら絶対にこういうことをしません。そこは職人の現場力があるからです。机上のデザインが、こういうことになるんじゃないかと思うんです。人間は、それぞれです。それぞれにニーズがあります。それに対して、われわれが、どういうふうに対応するかということは、今後の人材育成の基本です。

私は3 Aがこの人材育成に大事だと、いつも言っているんです。awareness(認識)をしなければいけない。まわりがどういうふうに変革しているか、adaptability(適応能力)です。私がいつも行っている熱帯林では、適応能力は、一番大事なんです。熱帯林の中で一番大きいものよりも、一番適応能力が高いものが生存しつづけるんです。大きな樹木でさえ、弱いものがあるんです。最後には、action です。さっき申し上げた行動力ですね。創造力を行動力に変えないといけない。枠を越えて考えること。そのために旅行が非常に大事だと思うんです。旅ができれば、皆さんやってください。だけどそれだけではいけないんです。倫理的に行動しなければいけないんです。他人の痛みの上に自分の利益が成立つということは絶対に駄目です。これからのコーポレート・ソーシャル・リスポンシビリティのきつい環境ができる中では、これが一番大事なんです。インスピレーションと創造性が大事です。

私は地球人としての生き方を考えた時には、ブルントランド首相の報告書を皆さんが、よく語るんです。'Our Common Future' という報告書です。この報告書で後世代に向けて、地球のエネルギー資源を大切にすべきだと言っていることは、立派な志ですが、人間中心の視点だと思います。その代わりに、私がサバ州で、マレーシアの奥のほうで、キャベツの生産量を高めようと思って、虫が食うものを先に取り出して、小屋に入れて保管したら、3割ぐらい、あなた方の生産量が増しますということを伝えた時には、その町の長老が、おまえの言うことによって、われわれが幸せになることはわかるけれど、虫は、そういう時には、何を食べるんですか。と私に聞いたんです。彼の世界観が、はるかに私の狭い技術者の世界観より広がった。そっちから学んだ私が、その以降、熱帯生態系のエネルギー的な換算をやり始めるんです。

地球が46億年前にできて、生命が36億年前に誕生したと言われているんです。その中でも人間が、今のホモ・サピエンスが10万年から20万年ではないかと言われているんです。その前のわれわれの先祖を含めても200万年前。だけど熱帯林の樹木は、数億年前からあります。小さな珊瑚が、人間より大きな構造物をつくれる珊瑚礁が数億年前からあるわけです。だから70万年から120万年ぐらいの間に、1生物種が絶滅すると言われていて、人間は、まだ大丈夫だと思うか、珊瑚のように数億年先まで生き残りたいかということを考えて、われわれが人材を育

成しなければいけないんじゃないかという気がします。理性と感性は大事です。技術はもちろん大事ですが、視野の狭い技術力だけでは、これから役に立たないんじゃないかと、その技術の視野を広げる1つとしては、現場力が大事です。現場力を現す代表的な活動は、モノづくりです。この地域が、その力があふれていると思うんです。そこをどういうふうにわれわれが、その知識と直感を展開して人間形成の中に、己を知る、地球を知る、という世界観の元で、展開するかということが大事です。現場力と直感は、非常に深い関係を持っています。私が四半世紀の付き合いの中での熱帯生態系の中で、復元をやっているんです。やっとその復元のカギがわかった。中核の生物種は、何であるかと、アイデンティティに対する。若い時には、弱いから、そこを定着するまで養育する。その後、自然に任せると多様な生態が戻るんです。なぜ、多様な生態に戻るかわかりません。だけど、そのナゾが解けないまま、私が現場に下りないということであれば、この実験はできなかったと思うんです。だけどこの中核の生物種2つを照らし合わせると、生物の多様性が戻るんです。さっきの熱帯林では大きな樹木、フタバガキカというリットロカーブという樹木と巨大なイチジク、ジャイアント・フィックの関係です。珊瑚の場合は、いま皆さんにお見せしますが、もう巨大なシャコガイと珊瑚の小さな種との関係です。このシャコガイに甲冑層という段々、この良好な関係で増えてくるんです。増えてきて、どこかでシャコガイが、ちょっといらだち始めると、人間でいうクシャミみたいなものをするわけです。そしたらこの甲冑層が飛んでいって、下りたところに、もし珊瑚礁の種があったら、そこでまた珊瑚礁は、広がるわけです。そういうことを見つけることは、できるけれど、この2つが貴重な中核生物種だということを、なぜわかるかという、何度も何度も現場に戻って、実験をやった現場力の結果です。この直感です。机上で計算して出たものではないんです。だから何をすれば、復元できるかというのがわかるけれど、どうしてそうなるかというナゾは、私はまだ解けていないんです。いま、そこに対する取組みをやっているんですが、それはできるかどうかという保証がない。だけど現場に下りたお陰で、6年から8年の間に、珊瑚礁を復元できるということです。だからこのメッセージが、モノづくりの現場に下りて、物事を丁寧に取り組めば、絶対に人間は、成長するということです。私はまだ未成熟なものが多いんですが、少なくとも、この分野の、ここまで何とか、できたということが、現場に下りたお陰です。

また、awareness, adaptability, action に戻りますが、変革する技術環境にわれわれは対応しなければいけない。どうすればいいんですか？ここが大事なんです。変革する政治環境に対応しなければいけない。グローバルゼーション、アジアの共同体づくり、いろんなものが出てきます。どういうふうにわれわれは、対応するか。やはり人間としては、安全だと思ったところでSARSや鳥インフルエンザや、わけのわからないものが出るし、テロが発生するし、人間の安全を、どう保障すればいいか。また、環境とともに継続的に生きるのであれば、サステナビリティ（持続性）の原則は、何であるか。そういうようなものを背景において、考えながら、この認識、適応能力と行動力が大事だと。理念としては、私の大学は、そういうような現場力をつけて、

創造力をつけて、アジア、太平洋地域の若い人材を育成しようと始めた大学ですが、いま見ているとアジア、太平洋地域を越えて、アフリカや東ヨーロッパ、中央アジア、いろんなところから学生諸君が来てくれて、アジア、太平洋地域に注目する方々が来ているという感じがします。この学生諸君に、僕らはいつも、倫理観、規範的な行動ができるように、この設立の理念、自由、平和、ヒューマニズム、国際的な相互理解とアジア地域、太平洋地域、また、自分の生きている地域の未来を創造するものになってくれと言っているんです。詳細はまた、パネル・ディスカッションの時に時間があったら言いますが、その対応のために来年から新学部をつくらないで、5つのインスティテュートをつくることになります。このインスティテュートでは、教育もやります、研究もやります。コンサルティングもやります。社会貢献もします。そこに1学問に頼らないで、分離融合型で、クロスオーバー・アンド・プログラムといって、複数のモジュールで形成しているクリエイティブな教育システムを開発し始めています。その教育システムの根底にあるアクティブ・ラーニング・モジュールと下に書いてあるものが、半分ぐらいの専門単位が現場に行って、学んでもらえるようにします。それも勝手に話すのではなくて、現場も非常に自分が準備をしていて、その成果を取り戻せるような仕組みにしようとしています。今あるアジア・太平洋学とアジア・太平洋マネジメント学と同様に健康・環境生命、情報通信技術、観光・ホスピタリティ・ヘリテージ、国際戦略研究、言語文化研究、こういうような5つのインスティテュートを、なぜつくったかということは、パネル・ディスカッションの時に語らせてもらいます。少なくとも、その中にあるクロスオーバー・アドバンストプログラムとグローバル・アクティブ・ラーニングを大学の中でやろうと思っています。

PREXにも協力をお願いしたい事を2つ申し上げます。

4月から、20の企業、グローバル企業や、経済団体などから世界戦略のためにグローバル人材を育成してくれないかという要請がきています。PREXへの要請に非常に近いものです。ぜひ、共同でやりたいと思っています。もう1つは、これも後ほどパネル・ディスカッションで語りますが、私にとっては、「アジアモノづくりファンド」といったものをつくりたいんです。このファンドは何かというと、日本のモノづくりの伝統は、この理数離れしている日本の中では、残らないのではないかという危機感を感じます。世界のどこか、残ってもいいと思っていまして、アジアの億万長者たちが日本の技術力を持っている、モノづくりの企業に、中小・中堅企業に、投資をしてくれないかということを頼みたいんです。アジアの億万長者たちがアメリカに投資をします。イギリスに投資をします。オーストラリア、ニュージーランドに投資をします。カナダに投資をします。日本に投資をすることは少ないんです。なぜでしょうか。もっともっと、それを促進したい。日本のモノづくりのすばらしさを、この関西地域から発信できないでしょうか。ぜひ、皆さん、協力を願いたいと思っています。最後にこういうことをやろうとしたら、己を知ること大事ですが、多少、背伸びをしないとできない。アリから僕らは何を学べるんですか、人間はいつもアリを見下していると思うんです。だけど謙虚になったらアリからも学べるんです。アリが、ここに持っている木の皮が、このアリの体の40倍です。人間に例えると、われわれが

車2台を、自分の歯で持って坂を登っているようなものです。こういうことは、残念ながら、まだ人間ができないんですが、多少背伸びをしてでも、さっき申し上げたグローバルな人材育成やアジアモノづくりファンドを形成することにがんばってみたいと思っています。皆さんもぜひ協働してください。ありがとうございます。